

第74回

“社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト

入賞作文集

更生ペンギンの
ホゴちゃん

BBS会の
イルカ姉さん

更生ペンギンの
サラちゃん

保護司の
クジラ先生

協力雇用主の
アシカ親方

更生保護女性会の
オコジョさん

“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会

はじめに

法務省が主唱する「社会を明るくする運動」は犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちや非行をした少年たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。

本運動の一環としての作文コンテストは、次代を担う小・中学生の皆さんに、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行などに関して考えたこと、感じたことを作文に書くことを通じて、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

本書は、応募のあった埼玉県内の小・中学生一四七四作品の中から、入賞作品を収録したものです。小・中学校の児童生徒の皆さんはもとより、学校の先生、保護者の皆様など一人でも多くの方々に読んでいただき、青少年の健全育成・非行防止に役立てていただくとともに、「社会を明るくする運動」に対する一層の御理解・御協力をいただければ幸いです。

終わりに、この作文コンテストの実施にあたり、多大な御尽力をいただいた埼玉県及び県内の各教育委員会や学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和七年一月

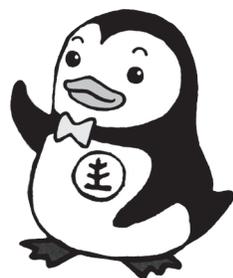
「社会を明るくする運動」埼玉県推進委員会

目次

優秀賞

〈小学生の部〉

日本更生保護協会理事長賞・社会を明るくする運動 埼玉県推進委員会委員長（埼玉県知事）賞			
明るい社会はだれもがたから物	吉川市立吉川小学校	對馬 優	2
さいたま保護観察所長賞			
信じるチカラ	三郷市立戸ヶ崎小学校	三澤 采峰	4
埼玉県保護司会連合会会長賞			
犯罪をしないために	加須市立元和小学校	星野 悠樹	6
埼玉県更生保護観察協会理事長賞			
あいさつの魔法	幸手市立幸手小学校	小倉 美織	8
埼玉県更生保護女性連盟会長賞			
生えさせない犯罪の芽	幸手市立幸手小学校	福島 颯介	10
埼玉新聞社長賞			
SNSの恐ろしさ	幸手市立幸手小学校	高橋 大翔	12



優秀賞

〈中学生の部〉

『社会を明るくする運動』埼玉県推進委員会委員長（埼玉県知事）賞

みんなで灯す光……………三郷市立南中学校……………笈田麻陽 16

さいたま保護観察所長賞

みんな孤独で……………さいたま市立浦和中学校……………鈴木花 18

そのひと声で人生は変わる……………吉川市立南中学校……………加藤美詞 22

埼玉県保護司会連合会会長賞

言葉のおくりもの……………川口市立南中学校……………後藤愛乃 24

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

人と人とのつながり……………桶川市立加納中学校……………石川峻佑 26

埼玉県更生保護女性連盟会長賞

「自己承認」と「相互扶助」で築く社会……………川口市立高等学校附属中学校……………田中咲希 28

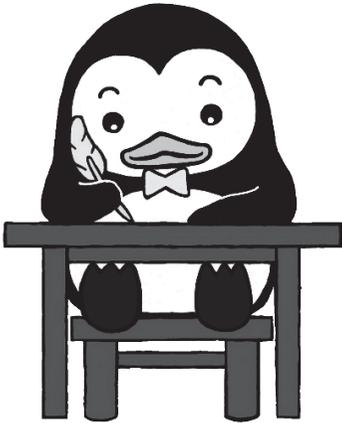
埼玉新聞社長賞

小さいようで大きい私の感情……………三郷市立早稲田中学校……………畑山颯稀 32



優
秀
賞

小学生の部
六点



日本更生保護協会理事長賞・

社会を明るくする運動、埼玉県推進委員会委員長（埼玉県知事）賞

明るい社会はだれもがたから物

吉川市立吉川小学校三年

對馬 優

わたしに妹が生まれたときにお母さんが、「ゆうちゃんもれいちゃんもママのたから物だよ。」と言ってくれました。その時、わたしはともうれしくて、大切にされているんだと感じました。生まれてよかったですと思いました。

しばらくして、テレビのニュースを見ていた時、お母さんにしつ問しました。「ニュースに出るよくなわるい人も、だれかのたから物なのかな。」お母さんは、「きつとそうだと思うよ。家ぞくや友だち、ほかにもその人を大切に思う人がいるんじゃないかな。」と言いました。

わたしはわるいことをしてしまった人もだれかのたから物かもしれない、とは考えたこともありませんでした。「だけど、わるいことをした人をたから物と思えるのかな。」とわたしは言いました。わるいことをしたからその人からはなれていく人もいるかもしれないと思ったからです。「それはあるのかもしれないけど、おなかの中でそだったからにはどんな人もみんなたから物なんだと思うよ。生まれてきたってことはおなかの中で大事にされたってことだから。」そう言われて、わたしは妹がお母さんのおなかの中にいた時のことを思い出しました。お母さんはいつも体調がわるくて、気持ちわるくてはいていたり、ねていたりしてすぐ大へんそうでした。でもおなかの中で妹のことを大切にそだてていました。わたしの時も妹の時も、生むときとってもつらかったけどがんばったと言っていました。人が生まれることは大へんなことだと考えると、やっぱり生まれてきた人はみんなたから物なんだと思います。

生きている人は全いんだれかのたから物だから、やっぱりだれもががいがいしややひがいがいしやになつてはいけないと思います。みんながだれかのたから物だとそうぞうしたら、だれもがいやな思いをすることはおこらないはずです。

何かわるいことをしてしまった人は、ひがいしやの人だれかの大切な人だということがそうぞうできないのもあるけれど、自分が本当に大事にされているのかわからない人、まわりに自分を大切に思っている人がいないと思っている人なんだと思います。もし本当にそうだったとしても、この先、大切な友だちができることもあるだろうし、自分を大事に思ってくれる人や自分にとってのたから物と思える人と出会うこともあるんじゃないかなと思います。そうなったときに、自分がしてしまったことが本当によくないことだったと気がつけるかもしれない。そう思うと、犯罪をしてしまったもやっぱりだれかの大切な一人、たから物なんだと思います。

だから、わたしの思う明るい社会とは、どんな人も自分が大切にされていると感じることができてまわりの人を大切にできる社会だと思います。

今わたしができることは、相手の気持ちを考える人になること、友だちや家ぞく、まわりの人を大切にやさしくかわること、そしてこれから出会う人たちを大切にすることだと思います。これからたくさんの人と出会い、その人たちを大切にしていきたいです。あなたはたから物なんだよ、とつたえていきたいです。そうすると明るい社会に一步近づくと 생각합니다。

さいたま保護観察所長賞

信じるチカラ

三郷市立戸ヶ崎小学校六年 三澤 采峰

「みなさんは明るい社会と聞いて、どんな社会を想像しますか？」

私は毎日学校へ通い勉強をすることができる。地域の人たちに見守られて安全に登下校ができる。温かい家族がいる。それは当たり前のことではないと思う。

私が考える明るい社会をつくるために大切なことは、相手を信じることだ。相手を信じることは平和への第一歩だと思うからだ。相手を信じることで争いを防ぐことができるのではないか。友達との関係も、世界中で今も続いている戦争もそうだ。この戦争は国同士がお互いにゆずらない終わりが見えない争いだ。たくさんの方が命を亡くし悲しい時間が過ぎていく。新聞やニュースでは、SNSによる事件やいじめ、この夏は水の事故で亡くなる人のニュースをたくさん見た。私が毎日安心して生活ができるのは、家族と地域の人たちに見守られているおかげだ。近所のおじさんは、いつも自分で育てたとれたての野菜を持ってきてくれる。「学校は楽しいかい？」と嬉しそうに声をかけてくれる。スーパーの店員さんは私を小さな頃から知っていて「大きくなったね。」と喜んでくれる。この小さなつながりが、地域を穏やかにして安心して過ごせる社会をつくっている。小さなことでもみんなを支え合って助け合える社会でありたい。周りの人を大切にして小さなつながりを大切にすることが、平和で明るい社会につながると思う。

私には夢がある。それは将来弁護士になることだ。塾の先生に「将来の夢は何？」と聞かれたので、私は「弁護士です。」と答えた。そうしたら「他人の人生を背負うのは重すぎない？」と言われた。

確かにそうかもしれないと思つた。しかし、間違いや過ちを犯した人を救うことができる。色々な人の立場から社会を見ることができないのではないか。「更生」はきつと相手を信じて、その人は立ち直ることができる。人間はみんな間違いをする。大きな間違い、小さな間違い、間違ふことで学ぶことがたくさんある。今、世界で戦争をしていることもそうだ。人間が始めた大きな間違い。ちよつとした間違いではない。何千人、何万人、たくさんの人が関わりたくもない争いに巻き込まれているのだ。「想像力は知識よりも素晴らしい」というエジソンの言葉を兄から教わつた。想像すること、それは相手の立場に立つて物事を考えられることだ。友達との会話も家族との関係も想像力をふくらませたらもっと良い関係になれる。世界中の人が想像力をもつて行動できたらきつともっと平和になれる。

私が考える明るい社会は、ひとりひとりが自分らしく生きられることだ。みんなが自分の意見を言えること。子供もお年寄りも性別が関係なくみんなの意見が大切にされ尊重されること。ひとりひとりが温かい心でいられること。そのためにいま必要なことは、周りを信じていることができる心なのではないか。

犯罪をしないために

加須市立元和小学校四年 星野 悠樹

社会を明るくする運動について、ぼくが一番気になったことは、なぜ犯罪をした人の立ち直りをおうえんすることかということです。

この作文を書くにあたって、社会を明るくする運動について調べてみました。調べたサイトには、この運動は、犯罪や非行のない社会をつくること、犯罪や非行をしてしまった人の立ち直りをおうえんすること、と書いてありました。ぼくはそこがふしぎでした。今までぼくは、犯罪をしたらそれで終わりで、はんせいして刑務所ですらすか、ぼつ金をはらって家に帰ってくらす、それだけだと思っていました。でも、調べてみて、そんなかんたんな話ではないんだと知りました。

社会を明るくする運動には、立ち直りを支援する方法は様々あり、いろんな人がさん加できるイベントが行われてたり、ボランティア団体があったりして、犯罪や非行をした人と理解を深め、見守る運動になっていました。犯罪や非行をしてしまった人が、その後、いろんな人に助けてもらったり話を聞いてよりそってもらったりすることで、はんせいをふかめたり、もうつぎはやらないぞと思ったりできるんだそうです。

調べていく中で、ぼくも、まわりの人に助けられたなと感じたけいけんを思い出しました。三年生のころに左かたをこっせつしてしまい、数ヶ月間三角巾をまいて登校した時のことです。その時にぼくは気づきました。こっせつしているのに学校に通えたのは、ぼくだけの力じゃないということです。まず、登校はんのみんなが気づかってくれました。もちろん、家族のみんなが笑顔で送ってくれまし

た。学校に着いたあとも、同じ学年のみんなが心配してくれました。こまることが多くても、ぼくが明日も学校に行きたいと思えたのは、みんながおうえんしてくれたおかげでした。このけいけんから、ぼくは、こまったことがある時や、なにかを乗りこえる時には、自分の力や気持ちだけじゃなくて、まわりの人の助けや言葉が大切だと思っています。犯罪をしてしまった人も、そうやっておうえんしてもらい立ち直るのかなと思います。がんばって立ち直ろうとしている人の気持ち、自分のけいけんを思い出して、分かったような気がしました。

もうひとつ気になったのは、そもそもなぜ犯罪や非行をしてしまうのかということです。ぼくには犯罪や非行をしてしまう理由が分からないからです。

そこでまず、犯罪とはどういうものなのか調べてみました。調べたところ犯罪は「社会に対する危険な事」だそうです。また、はじめて犯罪や非行をしてしまったときの原因としてあげられるのは、ストレスや怒り、うらみ、人とのケンカなどでした。だれかと話していついカッとなってしまう事はぼくにもあります。なぜ犯罪をしてしまうのか、ぼくにはわからないと思っていたけれど、意外と身近なことだなと思いました。ふつうにすごしても、ふとしたことで、犯罪や非行につながってしまうことがわかりました。

社会を明るくする運動を書くにあたって、活動内容や犯罪について調べてみて、立ち直りにはまわりの人のそんざいが大切だということ、犯罪は身近なことからいつでも始まる可能性があることを知りました。あらためて、この社会を明るくする運動の大切さを学びました。これをもっとたくさんの方が知って、理解を深めたり見守ったりできるそんざいがふえるといいなと思います。これからは、自分のできるはいいで、犯罪や非行をしてしまった人の立ち直りをおうえんしたり、みまもったりしていきたいです。

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

あいさつの魔法

幸手市立幸手小学校五年 小倉 美織

私は、社会にはあいさつが大切だと思います。大人も子どもも誰でもできるし、日常生活でも旅行先などでもすることができます。私があいさつは大切だと思う理由は、大きく分けて二つあります。

一つ目は、あいさつをすることで人と仲良くできるからです。例えば、小学校に入学した時も、あいさつしたことで友だちの輪が広がりました。他の幼稚園の子から「こんにちは」と話しかけられたときはとても嬉しかったです。このように、あいさつをすることによって、新しい友達を作ることができます。

また、地域の人とも、「おはようございます」「こんにちは」で仲良くなることができます。毎朝、登校の時に横断歩道などに立って私たちを見守ってくれている地域の方々は、必ず「おはよう」と言ってくれます。そのおかげで、私たちは安全に学校へ行くことができます。他にも、下校中などに「おかえりなさい」と声をかけてくださる方もいます。そういうされると、「帰ってきたのだな」と思い、なんだか嬉しくなります。きっと、自分の存在を認めてもらっている安心感があると思います。

でも、ときにはあいさつをするときに勇気が必要です。「無視されたらどうしよう」と思ったりすることも、きつと、みんなが思ったことがあると思います。でも、くり返しあいさつをすれば、きつとすこしずつでも、相手からも話しかけてくれると思います。

二つ目は、防犯対策です。例えば、とあるデータでは、子どもがゆうかいされやすい時間帯は、登

下校時が一番多いと分かっています。確かに、大人がいるようで、実はつながっていない時間帯だと思えました。下校時も、あいさつをする習慣があれば大人との「つながり」ができます。また、とある会社がまとめた、「不審者が犯罪行為を諦めた理由」というものには、「住民となかよくしていたから」というものがありました。確かに仲の良い住民の輪に、不審者は入りにくいと思います。

私は、日頃からあいさつをして、地域の方とも顔見知りになっておけば、仮にゆうかいされたとき「何時にどこを見た」などと、目撃情報が得られるかもしれないな、と考えました。そうすれば、見つかったり、不審者が捕まる可能性が格段に上がったかと思うます。

また、犯罪者も、ブラッくな気持ちがあつてそういうことをしてしまうのだと思います。そういうときも、あいさつをして、返事をしたり、相手があいさつを返してくれたらすると、明るい気持ちになると思います。「自分も社会の一員なのだな」と自覚し、悪いことはやめようと心が変わるかもしれないな、と考えました。実際にそうだといいな、と思います。

これからも、私は地域の人たちの輪を大切にし、あいさつをしていきたいです。外国でも、例えばアメリカなら「ハロー」と、あいさつをすることができます。「あいさつをする」という文化は、日本だけではなく、世界で行われています。そのくらい大切であたり前のことをこれからも、私は続けていきたいです。

埼玉県更生保護女性連盟会長賞

生えさせない犯罪の芽

幸手市立幸手小学校六年 福島 颯介

「速報です。〇〇県の山中で身元不明の遺体が発見されました。」「先日の〇〇事件の犯人がたいほされました。」毎日毎日こんなニュースばかり、犯罪のない平和な世の中になるなんて不可能なんじゃないか。悲しいニュースばかり見ているとそう思ってしまう。犯罪を犯してしまった人は「ムカついた。」「人間関係のトラブルで。」「お金がなかった。」と、自分勝手な理由ばかり言っている。でも、犯罪を犯してしまう理由には本当はもつとちがう原因があったり、小さな出来事がきっかけだったりするかもしれない。

いまの世の中はたくさんさんの情報をすぐに知ることができる。「自分は周りのみんなとはちがうんだ。なんで自分だけが…」とこ立して苦しんだり、幸せそうな人たちを見る度に自分とちがうところを比べて心がどんどん暗くなってしまふ。そんなしゅん間を感じる出来事や環境が、いまの社会にはたくさん存在しているようにも思う。

生活や毎日を少しでも明るくできたら、そんな犯罪や事件もへっていくかもしれない。家庭環境やいじめの問題、大人になってからの会社での苦痛などは、かかえこまずににげ道を作ることや心が安らぐ場所がぜつたに必要。心理カウンセラーの存在や児童相談所という場所を、もつともつと身近にしなければならぬと思う。よくポスターなどで「あなたの心によりそう」などと書いてあるけれど、本当につらいと感じている人にとってはもつと心を許せるよりそい方や、信じられる存在になるうとすること、友達であるほくたちがなっていくことも必要なかもしれない。夏休みのじぜん活動

で出会った人から「ヤングケアラ」の話を聞き、ぼくは夏休みにそのことをもつと知ろうとヤングケアラの主人公の本を読みました。そこでも書かれていた周りのサポートの大切さや、気付いてあげることで、よりそってあげることの大切さ、勇気を持って行動することがとても大切だと思う。

家庭環境がれつ悪で、日々ぎゃくたいを受けている子ども、りこんや再こんで家庭環境が変わり、大人の身勝手な都合で子どもの居場所がなくなってしまう。それが原因で学校でもいじめやいやがらせを受け、もつと居場所がなくなってしまう。たとえば、幼少期のそんな事が原因で社会に不満を持ったまま大人になってしまったら「ふつう」という感情を知らずに犯罪を犯してしまうかもしれない。もちろん、大人になってからの会社での人間関係や家庭環境、社会への不満などがそうさせてしまう事もあるかもしれないけれど、今のぼくには分からない。でも、最近の自殺者や犯罪のニュースを見ていると、若い人がとても多いと思う。実際に、未成年の割合がとも増えているという事実をテレビで見ることがある。きつと、小さいころの出来事やたくさんあり過ぎる情報などが、その人の心を暗くしてしまうからなのかもしれない。

社会を少しでも明るくできたり、その人のつらい思いをしている人は、「周りにバレたらどうしよう、相談したり話したりすることでもつと悪くなったらどうしよう。」という不安をいつも持っていると思う。そんな不安までやわらいであげられるようにしていかなければならないと思う。もし、自分と同じようにつらい立場になった時、助けてくれる仲間がいてくれることはとても心が安心すると思う。

犯罪を完全になくすことは難しいかもしれないけれど、社会を少しでも明るくするためにぼくたちがいつもより、もつとよりそってあげることや、いつもとはちがう少しの変化に気づいてあげること、相談に乗ってあげて話を聞いてあげること、そんな小さなことから自分にできることを考えたいと思う。

SNSの恐ろしさ

幸手市立幸手小学校五年 高橋 大翔

ぼくは、スマホを持っていますがSNSはやっていません。どうしてかというと、ひぼうちゆうしようや、ちよつとしたことから個人情報もれるなど、こわいことがあるからです。

また、ネット上では、人が直接言うのではなく、文字として残るのでそれもこわいことです。そして、ニックネームを使ったり、顔を伏せて相手に送るので、その受け取った相手は、ひぼうちゆうしようなどを送られたら直接言う以上に心にきずがついたり、悲しくなったりして自殺の原因にもつながってしまうかも知れません。

だからぼくは、SNSはおそろしいのでやらないほうが自分のためだと思います。

もちろんSNSには、メリットもあります。しゅみと同じ人と出会えたり、友達になったりもします。でも、自分のちよつとした発言で、たくさんの人がいやな気持ちになったり悲しくなったりします。だから、SNSの問題がたまにニュースになったり、ネットでさわがしくなります。

今年のパリオリピックで、じゆう道の阿部詩選手が二回戦で負けて、大泣きしてしまいました。ネット上では、批判の声が多く、阿部選手がインスタグラムでそれについて謝りました。ぼくは、あんなにがんばった選手に対して批判する人たちの気持ちの方が分かりません。「じゆう道家らしくない」とSNSで言う人もいましたがこれまでの努力を考えたなら、そんなことは言えないはずです。一方で会場にいた人たちからは、詩コールが起こり、泣いたことに対して、共感や応えんする声がありました。ぼくは、テレビやネットで見た人たちよりも、現地で観戦した人達のほうががんばりが伝わった

と思います。

ぼくは、SNSでひぼうちゆうしようすることは、犯罪だと考えます。なんとなく投こうした一言にきずつけられて思いなやみ、立ち直れなくなってしまう人も中にはいます。相手と向き合って言えないことも、どうしてSNSでは言えてしまうのでしょうか。きつと相手に顔も名前も分からないから何を言ってもいいんだという気持ちになってしまっているのだと思います。それはとても最低なことです。この前SNS上で芸人さん同士がトラブルを起こしていましたがそれもやはり心ない一言が原因でした。その一言のせいで言われた側は深くきずつき、言った側は、仕事が出来ない状態までに追い詰められてしまったのです。言葉は一步間ちがえると恐ろしい凶器になってしまっているのです。

ぼくは、言った側が謝っても、言われた側は、最悪一生の心のきずになるかもしれないと考えました。

ぼくは、社会を明るくするためには、顔や名前を伏せてSNS上でひぼうちゆうしようなど好き勝手するのではなく、ちゃんと向き合って話をするのが大切だと思います。かげで言ったりSNSに投こうしたりすると、悪口になってしまう言葉も面とむかって言えば相手のことをささえたり、思い合ったりする言葉に変わる場合もあると思います。

ぼくは、これからもっとSNSの利用がふえていくと思うけど、ぼくは、みんなが一人一人との会話を大切にすることで明るい社会になっていくのだと思います。

優 秀 賞

中学生の部 七点



社会を明るくする運動 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞

みんなで灯す光

三郷市立南中学校三年 笥田 麻陽

僕は保育園のころから小学生まで、不安定な情緒の子供でした。気に入らないことがあるとその場を立ち去ってしまったり、言い争いから手が出てしまったりすることが多かったと思います。その度に母は謝罪に行き、もちろん僕もたくさん叱られました。

母はいつも僕と正面から向き合ってくれていました。何が正義で何が悪なのかあいまいな子供同士のトラブルだとしても軽く考えることなく、僕を一人の人間として正そうとしてくれていました。

上手く生きれない僕はとても弱く、少しずつ心を閉ざし、攻撃することで自分を守ろうとしていたんだと思います。その頃の僕はみんなと同じにできないという疎外感からなんでも暗く考える毎日でした。小学3年生になるころ、「彼をこれ以上加害者にさせないようにしましょう」そう言ってくれた先生と母とで相談し支援級に措置替えになりました。医療の力も借りて、たくさん大人の大人とたくさん仲間に支えられ、少しずつ前向きに生活できるようになってきました。母は学校以外の場所でもたくさんの人と関わるようにしてくれました。僕の好きなバスケットボールを習わせてくれたり、療育に通ったりして僕の居場所をたくさん作ってくれたのです。みんなと同じにできない事、イライラする事、なんにもうまくいかない悲観していた日々もやがて、うまくいくことはたまにあると思えるようになっていき、僕の気持ちに寄り添ってくれる人がいるんだと安心できるようになりました。「障害児なんだろ?どっかいけよ」とか「あなたが頑張っているかどうかじゃなくてみんなと同じようにできないと評価できません」とか一瞬で絶望感を抱かせる言葉を言われても自分の気持ちをコン

トロールできるようになっていました。いつのまにか学校ではもちろん、そのほかの場所でも他害をしてしまうことはなくなっていました。

僕だけでなく、人は弱いものです。小さなことで傷つき、悩み、心を閉ざし、世の中がどんどん狭くなります。挫折感や孤独感、絶望感から非行にはしる人や犯罪を再び繰り返してしまう人がいるのだと思います。それに対し正義を振りかざして自身の保守のために攻撃する人もいます。そんな人たちを助けられるのは、やっぱり人なのだと強く思うのです。一人で方向転換するのは思ったより困難です。その時に誰かが声をかけ、手を差し伸べることで、自分の弱さを自覚しつつ前を向く勇氣ももてるのだと感じます。

犯罪を犯して服役していた人を積極的に雇用する会社の社長さんのインタビューを見たことがあります。罪を犯してしまう人の中には、いじめにあっていたとか、虐待されていたとか、居場所がなかったとか、発達障害でしたなど悲しい理由がある人が多くいる印象でした。救いや居場所を求めて、自分の価値を探してもがいているうちに犯罪に手を染めてしまう人が多くいるんだと知りました。間違いに気が付いた人や、罪を償った人が悔いて更生を願っているのに許さない人の保守正義の言葉が刺さって自暴自棄になりまた繰り返し返してしまうのだと。だから働ける場所をつくってあげることが平和な社会を作る一歩でもあるんだと言っていました。

僕は暗い気持ちの生活から、とても早い段階で、世界は広いんだということや、あたたかい人の手を感じて明るく生きることが出来ています。支えてくれる人がいなくなったら暗闇にずっといたままだったかもしれません。きっと自分のことも他人のことも大切には思えなかったことでしょう。そんな状況が長く続くと暗闇にいたほうがいいとさえ思うかもしれません。

人には人に光を照らしてあげられる力を持つていると僕は信じています。誰もが少しずつでもあたたかい光を照らしてあげることができれば暗闇から光をみつけることも可能なのです。その名の通り社会を明るくあたたかくすることが可能だと思います。その社会はきつととても美しいはずです。

さいたま保護観察所長賞

みんな孤独で

さいたま市立浦和中学校二年 鈴木 花

重松清さんの「青い鳥」の中に収録されている「ひむりーる独唱」という作品がある。私は、これを読むまでは、罪を犯してしまった人の気持ちを考えたことすらなかったのだ。

ある日中二の斎藤義男は、気に入らなかった担任をアーミーナイフで刺してしまう。それから三か月後に義男は元の学校に戻ったが、みんなが自分を見て逃げていくので、孤独を感じていた。そんなとき、臨時担任をしていた村内先生が草野心平さんの詩集を読むように勧めてきた。義男はそれを読み、村内先生と話すうちに孤独を分かち合える喜びを知る。

私は、少年犯罪についてあまり知らなかったので、この話を読んで衝撃を受けた。その後インターネットで調べてみると、未成年が起こす犯罪の原因として、学校生活でのトラブルなどで悩みを抱えたり、恵まれない家庭環境で感情のコントロールができなくなってしまうたりするケースがあるとわかった。義男も、自分には人より優れているところが一つもないと自暴自棄になり、また深い孤独感に苛まれていた。さらに、少年院から出た子供の多くは就職を選択するが、勇気を持って進学や復学を希望する人もいることを知った。

誰にでも悩みはあるのだから、問題はそれをどのようにして解決するかだ、そう思った。私なら家族に相談するが、先ほども述べたように、家庭環境に恵まれない子供も多い。そのような子供が学校などで悩みを抱え、家庭でも解決できないと考えると、子供は自分の安心できる居場所を失ってしまうことになる。私はそのような境遇の子供に必要なのは、地域の人との繋がりなのではないかと考え

た。

私は近所の人とたくさん会話できるほどではないが、朝笑顔で挨拶を交わすだけで、今日一日頑張ろうと思えるようになる。誰にでもそのような経験はあるのではないだろうか。一度想像してみてもいい。例えば孤独を感じて怯えていた自分に、笑顔で挨拶をしてくれた人がいたとする。その日に限らず、どんな日でも会う度に声をかけてくれる人が自分にはいるのだという実感が、安心感に繋がるのではないか。私は、地域のひととの交流、また挨拶をこれからも大切にしていきたいと思う。

ただ、私は、実際罪を犯してしまった人に対し、以前と同じように笑顔で挨拶できる人ばかりではないと思っている。そのように考えるのは、父からある話を聞いたからだ。

私たちはその日、パリ五輪で難民選手団の選手として出場した人を見た。私は、日本の難民認定率が非常に低いという事実を父から教わった。難民支援協会によると、日本の難民認定率は三・八%、米国は五十八・五%であった。父は、日本は島国なので、昔から内陸国に比べると外国との交流が少ないという地理的な問題により、知らない人や自分たちとは違うと感じる人とはあまり関わらないようにしようという、日本人にありがちな考え方が強くなってしまったのではないかと言う。

この話を聞いた直後の私は、それがあまりよいことではないという認識がなかった。そのため、「ひむりーる独唱」を読んでいるときは、義男に話しかけなかったクラスメイトの気持ちに納得して、それは自然なことだからと気にも留めていなかった。

しかし、今は違う。私たちは罪を犯してしまった人と自分たちとを区別しがちだが、それはおかしいと思うようになった。私は「犯罪」という行為自体が、心の奥に隠していた苦しさが爆発した証拠そのものであり、そうなるまでに誰も手を差し伸べなかった、或いは、当人が納得していないのに事態は改善されたと決めつけていた人たちがいるのだと思う。それは絶対にあってはならないことだ。

そして、少年院などから出た人たちが新たな進路で、周囲からの厳しい目線により自分が否定されているように感じてしまったら、未来への希望が霞んでしまう。今後、罪を犯してしまった人の更生を支援する仕組みを、さらに充実させるべきだと思う。また、罪を犯してしまっても、就職や進学と

いった新しい目標を持って進もうとしている人に対して、さらに優しい社会になることを願っている。そして、罪を犯してしまった人に対するイメージが少しずつ変わってほしいと思う。

犯罪を未然に防ぐことが最も重要であることは間違いない。誰もが居心地が良いと思える地域を作るために、これからも地域のひととたくさん挨拶をし、進んで困っている友達や家族の相談に乗ろうと思う。当たり前前のことこそ、一番簡単で一番大事なことだと思う。

草野心平さんの詩の中に、居場所を失っていた義男に勇気を与え、背中を押した言葉があるので紹介する。

「みんな孤独で。みんなの孤独が通じあふたしかな存在をほのぼの意識し。うつらうつらの日を過ごすことは幸福である。」

みんな孤独なのだから、一人で悩みを抱える必要はない。そして、みんな孤独なこの社会に生きる人たちなら、必ず助け合えるはずだ。

ホゴちゃんの更生物語



さいたま保護観察所長賞

そのひと声で人生は変わる

吉川市立南中学校二年 加藤 美詞

「もうひとりで生きていくからほっといてくれ！」テレビドラマでそんなセリフを耳にした。家族やきょうだいがおらず天涯孤独の身と言われる人はこの世の中に五万といるだろう。高齢になればなおさらだ。しかし実際にはひとりではなく近所の人、仕事先、高齢者施設や飼い猫とも関わりを持って、支えたり支えられたりして生きているはずだ。だから人はひとりでは生きていけないし、生きられない。

こんな話をするのは、伯母から聞いたある事件を思い出したからだ。お金に困った親の欲望によって、十代の息子が祖父母を殺してしまった事件だ。学校にもほとんど行かせてもらえなかったこの少年の悲惨な生い立ちを聞いた時、私は胸が苦しくなり聞くに耐えられなかった。しかしどんな理由があったにせよ殺人は絶対にしてはいけない。法律関係の仕事をしている伯母は様々な家庭の事情を見聞きしている。豊かな日本だけれど、この少年のような住所不明児はまだまだ多いと聞く。悪人の遺伝子を持って生まれてくる赤ちゃんなどいない。この少年だって純粹無垢で生まれてきたはず。だから成長過程での環境や周りの大人達からの影響は大きい。

この少年も一時期住所不明児であったそうだ。事件を起こす前にだれか一人でも少年の行動に違和感を感じ、気に掛けてくれたら。そして勇気を持って少年に声を掛けてくれたら。少年の人生は大きく変わっていたはずだ。

私は今まで衣食住に困ったことはないが、学校生活の中で困ったことや恥ずかしい思いをしたこと

は数えきれない。自ら声を挙げるのが苦手だった私に、先生や周りの仲間が気づき声を掛けてくれて救ってくれた。だからこそ今の私が存在していると改めて感じる。私の小学校入学前、母に連れられて近所の家々に挨拶してまわった。それは、私の顔と名前を覚えてもらうためだ。また、登下校時に声を掛けてもらうことで犯罪に巻き込まれにくくするためだったと、最近になって母から聞いた。そのおかげか、犬の散歩をしている人やゴミ出しの人に「いってらっしゃい。日焼けしたわね。テニス頑張っているわね。」などと声を掛けてもらっている。地域の人と関わりを持つことで、私自身の視野も広がる。

この少年にとって声掛けの他に不足していたものがあるなら、それは「教育」だ。前述にもあるように多感な少年時期に学校に行って友達を作り教育を受けていたら様々な感情、命の尊さを学ぶことができたのではないか。なにより、思いやりという「心」を育てる「思考回路が育ったのではないか。親から犯罪を命令されたとしても、脳内でブレーキをかけられたはずだ。

少年は、この先の事件のせいで、周りから避けられ苦しい人生を送るかもしれない。そこで出所後こそ、周りの支援と更生について理解を深めることが重要だ。調べてみると地域の犯罪・非行防止活動や罪を犯してしまった人の更生に協力するボランティア団体がたくさんあることが分かった。私の住む吉川市にも更生保護女性会がある。たとえ保護司という立場でなくても、話し相手になったり、話に共感することで信頼関係を築き、寄り添ってくれる地域の住民が増えるといいなと思った。そして私自身にもできる支援を考えて実行に移したいと思う。

世の中にとって他人に無関心であることがいちばん怖いことだから、地域社会で困っている人が居ないか関心を持ち続けることが大切である。

言葉のおくりもの

川口市立南中学校一年 後藤 愛乃

言葉は相手を笑顔にすることができる一方で、相手の心を深く傷付けてしまうこともある。

私がこのことを実感するようになったのは、小学校の全校集会で先生がおっしゃっていた「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」についての話が今でも強く印象に残っているからです。「ふわふわ言葉」とは、「ありがとう」や「大丈夫」など、言われて元気になったり心がふわふわと嬉しくなったりする言葉のことです。頑張っている時やつらい時に、ふわふわ言葉は相手の心を布団のように優しく包み込むことができます。一方、「ちくちく言葉」とは、「うざい」「むかつく」といった相手の心を傷つけ、悲しませたり嫌な気持ちにさせたりしてしまう言葉のことです。近年SNSでの心ない誹謗中傷のコメント等が問題視されていますが、私は、言葉を相手に届けることへの責任感のなさが、こうした悲惨な現状を作ってしまったのではないかと考えます。特に、SNSは直接顔を合わせずに匿名で書き込むことができるため、軽い気持ちで発信してしまうことが多いそうです。また、相手を傷つけていることへの自覚がなく、知らず知らずのうちに誤解を与えていることもあるのです。近ごろ、ニュースでもそういった言葉が原因でいじめや自殺などに追いこまれてしまったことの報道を耳にすることも多く、とてもつらく、やるせない気持ちになります。亡くなった人はもちろん、残された家族や友達のことを思うと、どれだけ悲しい思いをしているのだろうと胸が苦しくなります。亡くなった一人一人には、かけがえのない命があります。私と同じように、学校に行ったり、ご飯を食べたり、笑ったり、泣いたりしていたのです。当たり前の日常を生きていたのです。私は、何気ない一

言が相手を傷つけ、言葉の暴力となつて最悪な状況におとしいれてしまうことを、みんなが頭の片隅に置いておかなければならないと思います。そして、相手の気持ちを考えてから言葉を使うようにすることを習慣づける必要があると思います。私は、自分の言いたいことを相手にはつきりと伝えることが苦手で、心のためこんだ思いを家族にぶつけてしまうことがあります。ちくちく言葉を使つてしまう人がいることも、悩みや心の負担を抱えているからなのではないでしょうか。普段、自分の意見や意思を伝えられず、無理をしようとしてしまうと、体や心に負担がのしかかり、イライラしやすくなります。そして、自分の心を守るために物や人を攻撃するようになり、悪循環を生んでしまうのかもしれない。そんなときは、誰かに相談し、自分の気持ちを知ってもらうのが良いと思います。私も、誰かに話を聞いてもらうことで心が軽くなり、安心できた経験があるからです。そのときにかけてくれた私への思いやりにあふれた言葉から、たくさんの勇気をもらいました。ふわふわ言葉は言った人も、言われた人も、幸せな気持ちになります。それは、相手が自分の良さを見てくれた、自分のためを思ってくれていた、ということが伝わるからだと思います。

私たちは一人一人違う人間で、考えていること・感じていることはそれぞれです。だから、もし、自分と異なる考え方の人がいたら、否定するのではなく、お互いを認め、尊重していききたいです。そして、思いやりや優しさ、感謝の気持ちを伝えるために、ふわふわ言葉をたくさん使っていきたいです。みんなが誰かのことを思いやり、温かなふわふわ言葉をかけ合えば、そのほんの少しの優しさが人をつなぎ、明るい社会へと近付けるように思います。

埼玉県更生保護観察協会理事長賞

人と人とのつながり

桶川市立加納中学校二年 石川 峻佑

「学校の敷地内に落書きがありました。」二年生になってすぐの四月、担任の先生がこんな話をした。僕たちが登校するまでに先生たちが消してくれたりしたので、実際には落書きは見えない。でも、その後も野球部のグラウンドが水浸しにされたりして、野球が出来なくなってしまうことがあった。僕はそれを聞いてすぐさま怒りを覚えた。「くそ！ふざけるな。」などと、心の中で目に見えない相手を罵った。それと同時に、また起るのではないかという不安や恐怖、相手を許せない気持ちも湧いてきた。僕は、このことを祖母に話した。すると、祖母は、「かわいそうな人だね。なんでそんなことをしたんだろうね。」と言った。僕は一度もそんなことを考えたことがなかったので、驚いた。そこで祖母にさらに話を聞くと、「更生保護女性会」という会について教えてくれた。

僕の祖母は、更生保護女性会に所属している。この団体は、犯罪者を街から出さず犯罪を未然に防ぐために活動しているそうだ。具体的には、小・中学校で挨拶運動をしたり、子供たちと一緒に落ち葉掃きやチューリップの球根をうえたりしている。また、刑務所を訪問して、衣服や食べ物を寄付したこともあるそうだ。環境も心もきれいになるように。祖母は、「地域のおばあちゃん」として街の人と関わりを深めている。

その祖母が「そういう行動をしてみよう人にも仲間や寄りそう人がいれば、こんな悲しいことはしなかっただろうに。」と話したので、僕もその人のことを考えてみた。もしかしたら、この人たちは話し相手がいなくて一人ぼっちなのだろうか。また、人間関係が上手くいかず、勉強や学校がつまら

なくなり、やっていて楽しくない。だから、みんなを困らせたい、自分に注目させたいとこんなことをしてしまったのかもしれない。そう考えると、祖母の言う通り落書きをしてしまった人もかわいそうな人なのかもしれないと思えてきた。

では、どうすれば落書きなどの迷惑な行動を未然に防げるのだろうか。それは、信頼できる人や寄り添ってくれる人の存在が大切だと思う。僕だったら校長先生を悲しませたくない。それは、いつも誰に対しても「おはよう。」「ありがとう。」と温かく声を掛けてくれたり、学校のために草刈りや準備を一生けん命やってくれたりするからだ。部活では、ノックをしてくれたり全力で応援をしてくれたりする。そんな校長先生が悲しんだり苦しんだりする姿を見たくない。このように、困っていそうな人がいたら話しかけて、その人の話を寄り添って聞いてあげたり、普段から様々な人に挨拶や声掛けをしてコミュニケーションをとりながら生活していったりすれば、迷惑な行動をする人がいなくなるのではないかと思う。また、人々がお互いに「頑張っているね。」「ありがとう。」などと声を掛けたりしていい環境を作ること、みんなの心が明るくなっていくだろう。明るい社会・明るい未来は、人と人とのつながりの先にある。僕もこれから進んで、友達や地域の人に挨拶をしたり話しかけたりして、つながりを大切にしていきたい。

埼玉県更生保護女性連盟会長賞

「自己承認」と「相互扶助」で築く社会

川口市立高等学校附属中学校三年 田中 咲希

「ありがとう」「手伝おうか？」私の学校では身の回りでのこのような言葉が毎日飛び交っている。これは当然のことだと思っていたが、「いじめをなくしていくにはどうすればよいのだ」と考えさせられるような出来事があった。それは、久しぶりに小学校の友達と再会したとき。「Aちゃんって本当にムカつく」などとクラスメイトの悪口を堂々と言い、自分がしたいいじめを得意そうに話しているのだった。私は声が出ないほどショックだった。小学校の時は誰にでも優しく、いつも笑顔が輝いている、素敵な人だったのに。何が原因で彼女は変わってしまったのか、動揺を隠しきれずに彼女の話を聞いていると、私の身の回りでは考え難いような壮絶ないじめがあったようだ。

「人は環境で変わる」ということを実感する出来事だった。思いやりの心を持っていても、人を疑ったり異なる考えを受け入れてもらえない環境だったりすると、自分の弱さや自信のなさを隠すために、代わりにいじめに繋がる行為をしてしまうのではないか。もちろん、人と生活している以上、言動にイラッとしてしまうことはあると思う。そんなときに相手を決めつけて否定してしまうのではなく、自分と違った良さを認め、理解し合うことで、温かい雰囲気は築いていくことができるのではないかと私は考える。

これは、学校だけでなく、社会全体でも同じことが言えると思う。罪を犯してしまったけれど、もう一度立派な社会人として生きていこう、と決めた人を私たちが寛容な心で受け入れることができれば、今まで気づかなかった良さにも気づくことができるかもしれない。もちろん、私たちが犯罪者の

人を「あの人は悪い人だ」と決めつけて、心のシャッターを下ろしてしまうと、更生しようとしていた人も絶望してしまい、もう一度犯罪に手を染めてしまう、悪い「変化」になってしまう。

その集団や社会で広がってしまった悪い雰囲気や空気を簡単に変えることはできない。どうしたらよいのだろうか……。

方法の一つとして、私は一人ひとりが「自己肯定感」を持つことだと思う。「社会を明るくすること」と「自己肯定感」一見、繋がりはないように感じるが、これを持つことはとても大切だ。「あの子はいいな」「私はできていないからダメだ」という自信のなさ、やがて相手への嫉妬や妬みとなり、ひどい態度をとってしまうことがあると思う。

「自己肯定感」を高飛車で威張っている、というような誤ったイメージを抱いている人が多いだろう。私も以前は、自己肯定感が高いなんて自分で思うのは恥ずかしい、と思っていた。しかし、この言葉の本当の意味は「ありのままの自分を肯定すること」だ。苦手な部分を隠すのではなく、素直に受け止めることで、その部分が得意な人を理想の自分に重ね合わせ、さらに目標に向かって努力することができると思う。

初めは大きなことでなくても、その日に自分ができたことや頑張ったことを一日の終わりに振り返ってみることで一歩ずつステップを踏んでみてはどうだろうか。

つまり、「社会を明るくする運動」は必ずしも自分が社会のために尽くすことではなく、「自分」を明るくする運動だともいえるということだ。

時には、自分はダメだ、という自己嫌悪にかられることもあるだろう。私も、テストでの順位を見返していると悲しくなることもあるが、そんなときに支えてくれる家族や仲間がいた。もちろん初めから犯罪をしたいなんて思っている人はいないはずだ。苦しいときや悩んでいるときに出したSOSを受け取ってもらえず、悪事に手を染めてしまうのだから、気づけなかった私たちにも責任があるのだと思う。

周りの人が、誰かを変えることは簡単ではない。その人に「変わろう」という気持ちが必要ならば行

動をおこすこともないからだ。それでも、私たち一人ひとりがそのとき相手にとって最適な声掛けをすることで、やがて犯罪に繋がってしまふきっかけを消すことができるのだ。初めにも述べたように、私に通っている学校ではいじめや人を傷つけるような行動はないと思っている。しかし、自分にとっては何ともない言葉でも、相手にとっては重くのしかかる言葉になってしまったり、傷つける言葉になってしまったりするのかもしれない。自分にとっての「優しさ」を相手に押し付けるのではなく、時間をかけてゆつくりと相手に歩みより、相互理解をすること。それが、温かく明るい社会と、自己肯定感を持ち、自分の長所を認められる社会を作ることに繋がるのだと思う。

世の中から犯罪を全て無くすことは難しい。しかし、周りの人との支え合いと自分を認める力、「自己承認」をすることで少しでも犯罪や非行を減らせるようにしたい。

サラちゃんの更生物語



埼玉新聞社長賞

小さいようで大きい私の感情

三郷市立早稲田中学校三年 畑山 颯稀

「社会を明るくする運動」——私はその言葉を聞いても、正直どんな感じか分からなかった。「社会を明るくする運動」って、どんなことをすればよいのだろう。私の頭にはそんな思いがよぎっていた。

私は兄妹が多くいて、兄が一人、弟が二人、妹が二人と私は六人兄妹の中で次男である。親が毎日仕事で、兄はバイトのため、家では五人で過ごすことが多くなる。朝、テレビをつけると、また、犯罪の報道が流れてくる。毎日、事件の報道が絶えないのが、今の社会では当たり前のようになってしまっている。そんな世の中は、やはりおかしいと思う。なぜ、毎日のように、犯罪のニュースを見るようになってしまっているのか。「仕方ない」や「当たり前」で済ませてはいけないと私は思う。そんなニュースの中には、私と同じくらいの年齢の人が関わっているものも多い。今や、小中学生の年代も、重大な事件を引き起こす対象となってしまうのである。そんな社会を、放っておいてはいけない。しかし、今すぐ、私がこの社会を「変える」ことはできない。どうすればよいのだろうか。

私は約三年前、小学六年生の時、自分の消しゴムや、えんぴつが無くなるということが何度かあり、嫌な思いをしたことがある。毎日しっかりと筆記用具箱の中にしまっておいたものが何度か無くなるのだ。先生に相談したら、無くさないよう、注意するように言われ、私は、自分で知らないうちに無くしてしまったのだと思った。だがその後、二回、三回と続いたのだ。このことも先生に相談するとクラス全体に、この消しゴムとえんぴつの件を聞いてくれた。けれど何か知っている人はいなかった。

これが三回程あったからなのか、先生は私にこう言った。「もし、こういったことがあったら今度は警察ものだからね。」と。私はその時、決して自分が悪くないはずなのに、なぜか、ショックだった。幸い、先生がクラス全体に話してくれた日からは、えんぴつと消しゴムが無くなることなくなった。もし警察ものになってしまっていたら、どうなっていたかと考えると、今でも私は怖い感情が蘇ってくる。お金も関わっている物だったということもあり、もし、「事件」として扱われていたのではないか。そして、それからもっと大きな騒動を招いていたのではないのか。そう考えると、ニュースになるような事件の始まりは、あの時のような小さな騒動なのではないかと、私は思った。日頃の少しの油断などが火種となり、「もう少しくらい大丈夫」「あと一回だけ」という心の油断に火がつき、その火が、だんだんと大きくなっていき、大きな炎へとなってしまふ。そういうことから罪を犯してしまった人も、大勢いるのではないかと私は思う。

犯罪の道へと走ってしまった人の心理は、私たちには分からない。そこで私は少し考えた。もしも、心の少しの乱れがなかったら、自分の感情を制御することができていたなら、小さな罪でも、大きな罪でも一生背負うことも、なかったのだろう。何かを盗んでから、誰かを殺してから後悔することがほとんどだと私は思う。自分で歯止めをかけることができたら、人生を豊かにできていたのだろうと、最近のニュースを見て思った。

最終的に私は「社会を明るくする」とは、犯罪を犯してしまった人は、次に自分がするべき行動をよく考え、私たちも感情のコントロールが大事と考える。中学生の私には、犯罪をすぐなくすことは不可能だが、悪口やケンカを何か一言声をかけ、一つ一つの小さな火種を消すことができると思う。そのために私は日頃のちよつとした一言を大切にし、その大切さを多くの人に広めたいと思う。これが私の小さいようで大きい感情だ。



解 説



更生保護制度(こうせいほごせいど)

犯罪や非行をした人たちが地域社会の中で更生する(立ち直る)ことができるように、必要な指導や援助をして、健全な社会の一員として生きることを助ける制度です。

保護観察所(ほごかんさつしょ)

保護観察所は、各都道府県庁所在地(北海道には4か所)に置かれており、更生保護の業務に従事している法務省の機関です。埼玉県には、県庁前の法務総合庁舎に「さいたま保護観察所」があります。主に、家庭裁判所の決定により保護観察になった少年、刑務所や少年院から仮釈放や仮退院になった人、保護観察付きの刑執行猶予になった人などに対して保護観察(生活の目標や指針を定めてそれを守るように指導監督する一方で、就職の援助や宿泊所の提供などの補導援護を通じて、立ち直りを促進しようとするもの)を実施しています。

“社会を明るくする運動”(しゃかいをあかるくするうんどう)

法務省主唱の“社会を明るくする運動”～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

〈“社会を明るくする運動”に取り組む更生保護ボランティア〉

保護司(ほごし)



法務大臣から委嘱されたボランティアで、地域の実情や習慣をよく理解しているという特性を生かして、保護観察所職員である保護観察官と一緒にあって、保護観察を受けている人の立ち直りを支援する活動や、地域の方々に立ち直り支援への理解と協力を求める活動などを行っています。全国に約47,000人(埼玉県内は約1,400人)がいます。

協力雇用主(きょうりよくこようぬし)



犯罪歴や非行歴のため、仕事に就くことが難しい人達を、その事情を理解した上で雇用し、立ち直りを支援する民間の事業主です。全国に約25,000(埼玉県内は約900)の協力雇用主がいます。

更生保護法人(こうせいほごほうじん)

埼玉県内では、更生保護事業法に基づく2つの更生保護法人（埼玉県更生保護観察協会と更生保護施設清心寮）が、さいたま保護観察所と協力して活動しています。

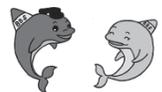
埼玉県更生保護観察協会は、更生保護に関する連絡調整・資金援助・広報を主な目的として活動している民間団体です。

更生保護施設清心寮は、住居や頼るべき人がないなどの理由で自立することが難しい人たちに、宿泊場所や食事を一定期間提供するほか、必要な援助や指導を行うことで、その円滑な社会復帰を支援している民間の施設です。



更生保護女性会(こうせいほごじょせいかい)

地域社会の犯罪・非行の未然防止のための啓発活動を行うとともに、青少年の健全な育成を助け、犯罪をした人や非行のある少年の改善更生に協力することを目的とするボランティア団体です。全国に約13万の会員（埼玉県内は約4,500人）がいます。



BBS会(Big Brothers and Sisters Movement)

非行など様々な問題を抱える少年に、兄や姉のような身近な存在として接し、相談相手となって、少年の自立を支援する「ともだち活動」などの非行防止活動を行う青年ボランティア団体です。全国に約4,000人の会員（埼玉県内は約80人）がいます。

〈“社会を明るくする運動”に取り組むその他の機関・団体〉

埼玉県県民生活部青少年課

埼玉県の青少年の健全育成と非行防止に関する施策を総合的に推進する業務を担当しています。

しあわせ 〈幸福の黄色い羽根について〉



更生保護のシンボルマークである黄色いヒマワリをイメージしており、“社会を明るくする運動”への賛同のしるしとして、この運動に参加する人たちが着用しています。幸福の黄色い羽根には、あやまちを犯した人たちが罪を償い、地域社会で立ち直ろうとするのを支える地域社会のネットワークを大きく広げていきたいという思いが込められています。

*“社会を明るくする運動”における「幸福の黄色い羽根」は、募金を目的とするものではありません。



入賞者一覧



小学生の部

賞	学校名	学年	名前
日本更生保護協会理事長賞	吉川市立吉川小学校	3年	對馬 優さん
“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞	吉川市立吉川小学校	3年	對馬 優さん
さいたま保護観察所長賞	三郷市立戸ヶ崎小学校	6年	三澤 采峰さん
埼玉県保護司会連合会会長賞	加須市立元和小学校	4年	星野 悠樹さん
埼玉県更生保護観察協会理事長賞	幸手市立幸手小学校	5年	小倉 美織さん
埼玉県更生保護女性連盟会長賞	幸手市立幸手小学校	6年	福島 颯介さん
埼玉新聞社長賞	幸手市立幸手小学校	5年	高橋 大翔さん

中学生の部

賞	学校名	学年	名前
“社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会委員長(埼玉県知事)賞	三郷市立南中学校	3年	笥田 麻陽さん
さいたま保護観察所長賞	さいたま市立浦和中学校	2年	鈴木 花さん
	吉川市立南中学校	2年	加藤 美詞さん
埼玉県保護司会連合会会長賞	川口市立南中学校	1年	後藤 愛乃さん
埼玉県更生保護観察協会理事長賞	桶川市立加納中学校	2年	石川 峻佑さん
埼玉県更生保護女性連盟会長賞	川口市立高等学校附属中学校	3年	田中 咲希さん
埼玉新聞社長賞	三郷市立早稲田中学校	3年	畑山 颯稀さん

※作品の公表・非公表については、御本人・御家族・学校等の意向を確認しております。

◇第74回 “社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト審査員

(順不同・敬称略)

埼玉県県民生活部青少年課長	山 口 将 毅
埼玉県教育局義務教育指導課主任指導主事	松 下 洋 介
埼玉県教育局義務教育指導課指導主事	田 中 速 夫
埼玉大学教育学部附属小学校教諭	小 川 祐太郎
埼玉大学教育学部附属中学校教諭	碓 氷 愛 実
埼玉県保護司会連合会会長	山 喜 光 明
埼玉県更生保護観察協会理事長	小 川 秀 樹
埼玉県更生保護女性連盟会長	青 木 照 子
埼玉新聞社編集局次長	山 関 美 和
さいたま保護観察所長	猪 間 徳 子

第74回 “社会を明るくする運動” 埼玉県作文コンテスト
入賞作文集

令和7年1月発行

編 集 法務省さいたま保護観察所 更生保護振興班

発 行 所 “社会を明るくする運動” 埼玉県推進委員会
法務省さいたま保護観察所内
〒 330-0063
さいたま市浦和区高砂 3-16-58
電話 048-861-8287

印刷・製本 関東図書株式会社

※本作文集の作品を引用・転載する際には、引用・転載元が「第74回 “社会を明るくする運動” 作文集」であることを必ず明記してください。

